#03_こういうのもカノジョのつとめ！～寧音の手コキ＆望海の耳舐めご奉仕～

★…寧音
◆…望海

★「ふふ、ご飯もちゃんと食べられて。偉い偉い♡」

◆「なんだか、子供を褒めるみたいな言い方ですね」

★「でも、元気になるには栄養しっかり取らないとだから。
　偉いものは偉いんだよ」

◆「まぁ、そうですね。私としても早く元気になってほしいですし」

★「そーそー！」

◆「でも…子供とも違う場所…あるみたいですね」

★「あ～たしかにね…」

◆「食欲を満たしたので性欲がわいてきた…ということでしょうか？」

★「ふふ…寧音や望海さんにさわさわされて、興奮しちゃったのかな？」

★「こんなにパンパンにしちゃって苦しそうだねぇ」

◆「仕方がないですよ。寧音さん。
　目覚めるまで、ずっと溜まりっぱなしだったでしょうし…
　それに、自分で処理するにも…」

★「あっ、そうだよね！　怪我のせいで、身体動かしづらいもんね！」
★「それなら！　性処理のお手伝い、しないとね。彼女として！」

◆「寧音さん、何を…!?」
★「何って手を使って気持ちよくしてあげようかなぁって。

彼女さんならこれくらい…するでしょ？」

◆「それは…そうですが。抜け駆けはずるいです！」

★「まーまー！　今回は寧音が先に気づいたんだから、
望海さんは次の機会にってことでっ！」

◆「まったく、自分勝手な人なんですから…わかりました。
今日のところは寧音さんがどうぞ」

★「やりぃ！　ありがと！　望海さん！」

◆「１つ貸しですからね」

★「それじゃあ、まずは下を脱がせてあげないと！
いいよ、寧音の方でやっちゃうから…」
★「ふふ、あなたのおちんちん…膨らんでるせいで脱がすの大変だよぉ。
待っててね、もうちょっとだから…」
★「…んっ」
★「わっ…！　すごい元気に反り返ってる…！
それに、タマタマの方もパンパン…！」

◆「…ゴクリ。こんなになっていたなんて…
言ってくれれば、いつでも処理したのに」

★「今まで処理できなくて、大変だったよね。
大丈夫、寧音がしっかりびゅーってさせてあげるから。
それじゃあ、始めるよ？」
★「ふぅ～…しこしこ…しこしこ…♡　しこしこ…しこしこ…♡」
★「へへっ、気持ちいいみたいだね♡
そんな顔してもらえると寧音も嬉しいなぁ。
ふふっ、じゃあこの調子で、頑張るねぇ」

◆「あなたがこんなに早く快感に身体を震わせるなんて…
少し妬いてしまいます。私も何かお手伝いをしないといけませんね」
◆「すぅ～はぁ～…ふぅ～」

◆「ふふっ、耳の感度もいいみたいですね。
　それでは私はこの耳を楽しませることにしましょう」
◆「すぅ〜…ふぅ〜〜〜ふぅぅぅ〜♡」

★「ふふっ…おちんちんは寧音のお手々でぇ。お耳は望海さんの息で！
　気持ちよくしてもらって嬉しいねぇ♡」
★「あなたが満足できるように、頑張るから…たくさん気持ちよくなって、
　たくさん出してくれていいからね？」

◆「そうです…私達は、あなたにたくさん気持ちよくなって
　もらいたいんですから。ただされるがままに、楽しんでください」

★「ほーら、しこしこ…しこしこ…気持ちいい♡　気持ちいい〜♡
　あなたの感じちゃうところはどこかな〜？　ここかな〜？
　それともこっちかな〜？　良いんだよぉ、遠慮せず言って〜？」

◆「ふふっ、耳が真っ赤になっていますよ？　恥ずかしいんですか？
　それともまた別の理由？　でも…そんな様子を見せられたら、
　私も興奮してしまいますし…より、あなたに尽くしたくなります」
◆「私の柔らかい所、たくさん堪能してください」

★「あっ、それいいね。望海さん。男の子って、女の子の柔らかい身体、
　大好きだから。寧音も、おっぱい押し付けちゃお〜！
　ほら〜むぎゅ〜〜〜っ♡」

◆「女性の柔らかい部分に触れて、身体を刺激される感触はいかがですか？」

★「この太ももも、おっぱいも、あなたのために毎日お手入れしているんだ〜
　寧音の肌すべすべでしょ？　うりうり〜」

◆「ふふ、そんなに気持ちいいんですか？
　なら、もっともっと気持ちよくしてあげないと…ほらほら…」

★「そうだね〜寧音も、もちもちお肌を密着させながら、

おちんちんシコシコしてぇ…もっともっと、ムラムラさせちゃおう〜。
ほ〜ら…しこしこ…しこしこ…しこしこぎゅっぎゅっぎゅ〜♡」

◆「ふぅ〜…なら私も…こういうのはいかがでしょうか？
真っ赤になった、この耳を…んっ…はぁむ♡
はむっ…んちゅ…はむっ、んむっ！」

★「わっ！　えへへ♪　望海さんにお耳を食べられて、
興奮しちゃったのかな？　おちんちん、寧音のお手々の中で
跳ね上がったよ！　それに、さっきよりも固くなった♡」

◆「はむっ…んむっ…耳を責められるのお好きなようですね？
では、こういうのはどうですか？　んちゅっ…ちゅ…じゅりゅりゅ…」

★「わわっ…耳に望海さんの舌が入ってる…これ、すっごいエッチだよぉ…」
★「よーし、寧音も負けていられないねっ…！
もっともっと、おちんちん…気持ちよくしていかないとっ！」
★「しこしこ…しゅっ…しゅっ…！　しこしこ…ぎゅっ、ぎゅっ…！
気持ちいい所を、念入りに〜しこしこしこ〜♡」

◆「んじゅぅ、れりゅ…れりゅ…れろぉ…もっと、してあげますからねぇ…
はむっ、れろ、れろ…んじゅ、れりゅ、れりゅりゅ…♡」

★「ほ〜ら。気持ちいい〜気持ちいい〜♡
おちんちんしこしこ気持ちいい〜♡」

◆「れろ…れろっ、んちゅ…ちゅりゅ…耳とおちんちんに意識を集中して、
感度を高めてみてください。きっともっと、快感を得られるはずですよ？
れろ、れりゅりゅ…♡」

★「そうだよぉ…そして、もうこれ以上気持ちよくなったら大変！
ってところで、たくさんびゅるびゅる〜ってしてほしいなぁ。
そしたらぜぇったい気持ちいいもんね♪」

◆「んちゅ…ちゅ…れろ…れろ…ぷはぁっ…そうです…

せっかく貴重な精子を出すんですから…出すなら…限界まで我慢して…
最高の瞬間で、出してください♡」

★「あっ、タマタマがキュウってなった！
そろそろおちんちん…限界が近づいてきたのかな？」

◆「ぷぁっ…どうやらそうみたいですね。顔を見たら、分かります♡」

★「ふふ、そうみたいだね♡　あなたの精子が出る所･･･
もうすぐで見られるんだねぇ。
なんだか、寧音、興奮してきちゃったかも･･･♡」

◆「最高の射精に導くために、私も頑張らないといけませんね。
もっと性感を高めるよう…少しだけ、下品に…」
◆「はぁぁぁむんっ…♡　んじゅ、じゅりゅ･･･じゅりゅりゅりゅ･･･♡
んじゅりゅちゅ･･･ちゅりゅ･･･んんっ♡」

★「寧音も、もっと気持ちよくなるように…
愛情たっぷりしこしこしないと…！
大好き…大好きなあなたにぴゅっぴゅってしてもらうんだもん。
もっともっと、刺激を与えて～…」

◆「りゅりゅ…んぁっ…じゅりゅ…んちゅ、ちゅっ…んちゅりゅる…
じゅりゅ…ほら、気持ちいいのが、昇ってきてますよ？
射精の準備、いいですか？」

★「ふふっ、大丈夫だよ。しっかり寧音が導いてあげるから♡
タマタマから昇ってきた精子、満足するまで、
たくさん出していいからね？」
★「ふふ、昇ってきた昇ってきた♡
お外に出たくてぐつぐつになったドロドロ濃厚精子♡
シコシコする手をもっと早くして、
最後の最後まで気持ちよくぴゅっぴゅさせてあげるからね♡」

◆「ほら、ほら、ほら、ほら♡　そろそろ我慢をやめてもいいんですよ♡
寧音さんのやわらかすべすべお手々に、たくさん出しちゃってください♡
私もサポートしますから…はぁむぅ♡」

★「いいよ♡　いいよ♡　出しちゃって♡　熱々精子、寧音のお手々や、
太ももに…あなたの好きなところにたくさん出しちゃって♡
ドロドロお汁で、恋人を真っ白に染めちゃって♡」

◆「出しちゃえ、出しちゃえ、出しちゃえっ！　　濃くて熱い精子を、
好きなだけ！　ほら、ほら、ほら、ほら！」
★「あっ、あっ、出るね♡　出ちゃうねっ♡　タマタマから昇ってきた精子が
一気に！　出る♡　出る♡　出る♡　出る♡」

★「せぇ～のっ♡　どびゅっ、どびゅ、どびゅっ～！
びゅる～びゅりゅりゅりゅ～♡　ぴゅりゅりゅ～びゅびゅびゅびゅ～！
びゅ～びゅ～♡　びゅ～びゅ～♡　びゅ～～～～っ！」

◆「あぁ…出てる…見ただけでネバネバとわかる特濃精子があふれるように…
すごいです…全然止まる気配がありません♡」

★「うん、それにすっごく熱いの…
これがタマタマの中で溜まってグツグツしていたんだねぇ。
すぅ…それにこの匂い…嗅いだだけで、頭がクラクラしてきちゃう」

◆「はい、こんなに濃厚なオスの匂いがするなんて…」

★「ふぅ…たくさん精子出せて良かったね♡
こんなに出してくれて、寧音、とっても嬉しいな♡
また、びゅっびゅってしたくなったら、いつでも寧音に言ってね♡」

◆「寧音さん、約束が違いますよ？　次は私が、性処理をするんですから」

★「ちぇ、バレたか…でもそうだなぁ。
その時は、今度は寧音があなたのお耳を舐めさせてもらおうかな」
★「楽しみにしててね。うふふ♡」
★「ちゅっ！」